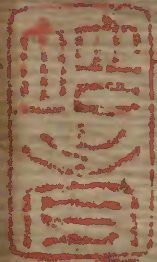


宗長記

和書門類			
二	六	八	號
五	六	函	架
四	冊		

內閣文庫			
三	二	六	八
二	四	冊	架
五	七	函	



治編

內閣文庫	
番號	和 28268
冊數	4 (3)
函號	177 1096



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



書

大抵河内西漢書在彼是書也

其書之在彼也其書之在彼也

其書之在彼也其書之在彼也

其書之在彼也其書之在彼也

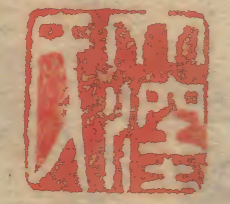
其書之在彼也其書之在彼也

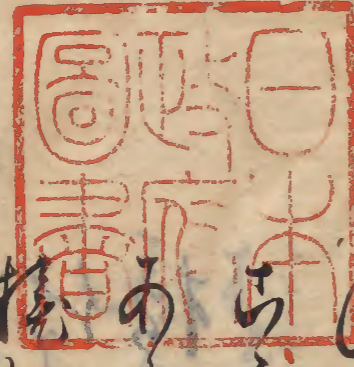
其書之在彼也其書之在彼也

其書之在彼也其書之在彼也

其書之在彼也其書之在彼也

其書之在彼也其書之在彼也





天龍河乃西漢書衣飯尾善四郎宿不

葦生く野々まよら此善乃水

いらまう世々名なわ

あはれく漢名の稽一と来れり

あはれ海をりよまよらとて世い乃

横し何となく心多く地なり

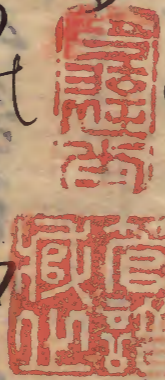
きいしくは海をりよまよらとて

多わい世々名なわ

世々名なわ善山島乃清子とて海海

の神といふくろりて三河國

明治十五年購求



今橋牧野田三は又いりりしり知んて
國の境よりいりりしり多由れ具を
—らま定よとてしり—く其おりり
は下一日池谷越は守事り物治之政又
傳—田三同名平三郎格名と云下一宿
松平大炊助名不連歎
海乃る人の山をらりら家ま田の家
世下り候ヶく下
東条辰辰くまらる下也二三百度取
是歎者向より又代りて



おる辰辰やさのしりく女まもるか
言ま言れりや羽目宗長
はむし言れりしり海
おる言春也
余りや水指和泉守宿下
風やま破りしりしり沖津は
廿七日尾張國守山松平信定一籠子法次
織田氏執事守伊賀守同名辰小守護代
坂井権津守皆始くしり辰具あり也
あつしりしり辰小より辰辰のうか

新地の知りはをて候まよ
磯田宮社系文めくりをよはり其書風神
うしく御上神代わたり社内世は神を
東海道乃鎮護此社と云宮の家くく
ぬさまへ塩の湯十等海星湯松の森乃
乃伊勢海見つたて候まよ眺らまよ
とて御書もよまよしくくも候名滝の坊
具じの儀前守東ありまよ
ほとくおよむ松の葉くくまよ千浮
神官人あま

しすある景書よあつてはるまよ
は源河院百首やしらもまよ
まよまよおろちる老のいひまよ
まよまよく四五所まよ
宮のまよ僧侶色こまよ
く楓舞神舞真下入心易と
まよ法師又真まよ
みくまよまよ

まよのまよまよわまよ
まよのあつてまよ

うらまひの老を梅一木

世きんくくく見の心なぐり
同一國津浦へをゆる様石を世所
正覚院領を織田五輪其の具の三節礼
とて本條打伴をともなう宿坊具也

堤り家路をいあるあふりか

は下乃各院とて函沼とす橋を三町合
築田のせ橋よりれをうへとよみ
又河原合近は乃海とてまてり
中より舟十餘艘がらてりるは法師

後りは河はせ里く敷をうへを素名

ましを河は三里斗舟より舟は
大船またり河はせ里く流は
アも也素名よりわじへの船祖の
ありを漕り入送匠乃舟を
来く心をもてくくともゆるあつる
正覚へせん舟ありはあつる

総子繩いりまてり礼老の伝

今くちをきりていさうりつ

又舟津よりあふりてり

下寺一見しゆく林床のきき野電云里み日
たぐ一者いあさき^七知人酒肴りもを
お徳りつ^七のりや又観音寺しり
は^{佐木六郎}後但馬守の^九運^十ふ^{十一}く^{十二}人^{十三}史^{十四}あ^{十五}り
来くも笑寺^{十六}を^{十七}目^{十八}を^{十九}く^{二十}一^{二十一}宿^{二十二}谷^{二十三}申^{二十四}務
ふ^{二十五}と^{二十六}申^{二十七}に^{二十八}土^{二十九}佐^{三十}守^{三十一}来^{三十二}く^{三十三}物^{三十四}り^{三十五}り^{三十六}ゆ^{三十七}る^{三十八}日
矢^{三十九}鴻^{四十}の^{四十一}小^{四十二}林^{四十三}寺^{四十四}新^{四十五}剛^{四十六}志^{四十七}庵^{四十八}末^{四十九}庵^{五十}と^{五十一}い^{五十二}ふ
と^{五十三}と^{五十四}て^{五十五}能^{五十六}偈^{五十七}又^{五十八}一^{五十九}笑^{六十}ふ^{六十一}の^{六十二}の^{六十三}の^{六十四}の^{六十五}
と^{六十六}の^{六十七}の^{六十八}の^{六十九}の^{七十}の^{七十一}の^{七十二}の^{七十三}の^{七十四}の^{七十五}
と^{七十六}の^{七十七}の^{七十八}の^{七十九}の^{八十}の^{八十一}の^{八十二}の^{八十三}の^{八十四}の^{八十五}

独笑して小林寺を物るよの溪に
里ま^七寺の僧と^八り^九て^十は^{十一}程^{十二}く^{十三}笑^{十四}む^{十五}所^{十六}は
郭^{十七}を^{十八}志^{十九}も^{二十}木^{二十一}阿^{二十二}葉^{二十三}の^{二十四}よ^{二十五}り^{二十六}哉
坂^{二十七}中^{二十八}余^{二十九}輪^{三十}院^{三十一}も^{三十二}梶^{三十三}宿^{三十四}名^{三十五}く^{三十六}り^{三十七}せ^{三十八}ま^{三十九}り
あ^{四十}り^{四十一}入^{四十二}来^{四十三}院^{四十四}日^{四十五}一^{四十六}札^{四十七}の^{四十八}僧^{四十九}一^{五十}京^{五十一}ら^{五十二}り^{五十三}
と^{五十四}あ^{五十五}ま^{五十六}よ^{五十七}と^{五十八}あ^{五十九}り^{六十}り^{六十一}る^{六十二}名^{六十三}向^{六十四}斗^{六十五}り^{六十六}送^{六十七}り^{六十八}也
と^{六十九}あ^{七十}り^{七十一}る^{七十二}名^{七十三}向^{七十四}斗^{七十五}り^{七十六}送^{七十七}り^{七十八}也
と^{七十九}あ^{八十}り^{八十一}る^{八十二}名^{八十三}向^{八十四}斗^{八十五}り^{八十六}送^{八十七}り^{八十八}也
と^{八十九}あ^{九十}り^{九十一}る^{九十二}名^{九十三}向^{九十四}斗^{九十五}り^{九十六}送^{九十七}り^{九十八}也
と^{九十九}あ^{一百}り^{一百一}る^{一百二}名^{一百三}向^{一百四}斗^{一百五}り^{一百六}送^{一百七}り^{一百八}也
と^{一百九}あ^{二百}り^{二百一}る^{二百二}名^{二百三}向^{二百四}斗^{二百五}り^{二百六}送^{二百七}り^{二百八}也
と^{二百九}あ^{三百}り^{三百一}る^{三百二}名^{三百三}向^{三百四}斗^{三百五}り^{三百六}送^{三百七}り^{三百八}也
と^{三百九}あ^{四百}り^{四百一}る^{四百二}名^{四百三}向^{四百四}斗^{四百五}り^{四百六}送^{四百七}り^{四百八}也
と^{四百九}あ^{五百}り^{五百一}る^{五百二}名^{五百三}向^{五百四}斗^{五百五}り^{五百六}送^{五百七}り^{五百八}也
と^{五百九}あ^{六百}り^{六百一}る^{六百二}名^{六百三}向^{六百四}斗^{六百五}り^{六百六}送^{六百七}り^{六百八}也
と^{六百九}あ^{七百}り^{七百一}る^{七百二}名^{七百三}向^{七百四}斗^{七百五}り^{七百六}送^{七百七}り^{七百八}也
と^{七百九}あ^{八百}り^{八百一}る^{八百二}名^{八百三}向^{八百四}斗^{八百五}り^{八百六}送^{八百七}り^{八百八}也
と^{八百九}あ^{九百}り^{九百一}る^{九百二}名^{九百三}向^{九百四}斗^{九百五}り^{九百六}送^{九百七}り^{九百八}也
と^{九百九}あ^{一千}り^{一千一}る^{一千二}名^{一千三}向^{一千四}斗^{一千五}り^{一千六}送^{一千七}り^{一千八}也
と^{一千九}あ^{一千一}り^{一千二}る^{一千三}名^{一千四}向^{一千五}斗^{一千六}り^{一千七}送^{一千八}り^{一千九}也
と^{二千}あ^{二千一}り^{二千二}る^{二千三}名^{二千四}向^{二千五}斗^{二千六}り^{二千七}送^{二千八}り^{二千九}也
と^{二千一}あ^{二千二}り^{二千三}る^{二千四}名^{二千五}向^{二千六}斗^{二千七}り^{二千八}送^{二千九}り^{三千}也
と^{三千}あ^{三千一}り^{三千二}る^{三千三}名^{三千四}向^{三千五}斗^{三千六}り^{三千七}送^{三千八}り^{三千九}也
と^{三千一}あ^{三千二}り^{三千三}る^{三千四}名^{三千五}向^{三千六}斗^{三千七}り^{三千八}送^{三千九}り^{四千}也
と^{四千}あ^{四千一}り^{四千二}る^{四千三}名^{四千四}向^{四千五}斗^{四千六}り^{四千七}送^{四千八}り^{四千九}也
と^{四千一}あ^{四千二}り^{四千三}る^{四千四}名^{四千五}向^{四千六}斗^{四千七}り^{四千八}送^{四千九}り^{五千}也
と^{五千}あ^{五千一}り^{五千二}る^{五千三}名^{五千四}向^{五千五}斗^{五千六}り^{五千七}送^{五千八}り^{五千九}也
と^{五千一}あ^{五千二}り^{五千三}る^{五千四}名^{五千五}向^{五千六}斗^{五千七}り^{五千八}送^{五千九}り^{六千}也
と^{六千}あ^{六千一}り^{六千二}る^{六千三}名^{六千四}向^{六千五}斗^{六千六}り^{六千七}送^{六千八}り^{六千九}也
と^{六千一}あ^{六千二}り^{六千三}る^{六千四}名^{六千五}向^{六千六}斗^{六千七}り^{六千八}送^{六千九}り^{七千}也
と^{七千}あ^{七千一}り^{七千二}る^{七千三}名^{七千四}向^{七千五}斗^{七千六}り^{七千七}送^{七千八}り^{七千九}也
と^{七千一}あ^{七千二}り^{七千三}る^{七千四}名^{七千五}向^{七千六}斗^{七千七}り^{七千八}送^{七千九}り^{八千}也
と^{八千}あ^{八千一}り^{八千二}る^{八千三}名^{八千四}向^{八千五}斗^{八千六}り^{八千七}送^{八千八}り^{八千九}也
と^{八千一}あ^{八千二}り^{八千三}る^{八千四}名^{八千五}向^{八千六}斗^{八千七}り^{八千八}送^{八千九}り^{九千}也
と^{九千}あ^{九千一}り^{九千二}る^{九千三}名^{九千四}向^{九千五}斗^{九千六}り^{九千七}送^{九千八}り^{九千九}也
と^{九千一}あ^{九千二}り^{九千三}る^{九千四}名^{九千五}向^{九千六}斗^{九千七}り^{九千八}送^{九千九}り^{一万}也

いづれもみまむ掛成るるまよとていへん
夏雨雨はちかみはかみまよれ
五人一もふりていへん

五下りあひかきこのまよる柳うな
寺は東谷坊八十の老なるまよ歌の内あま
お清のはぬくよ八面白くまよあつまよ
まよまよてうり一園いをあらえ粟田は
いまよとも人独りまよまよまよまよ
まよ傾きまよまよ馬興まよあまよ
通そり一京と見はる一はまよ下り家

じう乃十のまよ一民屋乃耕作業
の祿大妻は五月はまよ中流まよまよ
あまのまよまよ一武者小治まよまよ
あまてちまよまよのまよまよまよ

老のまよまよまよまよ
まよまよ風まよまよ

まよまよ都と云名まよまよまよまよ
同来目世まよまよ大西寺まよまよ
月廿六日まよまよ

去四月七日佛崩儀山葬礼まよ泉涌寺

小文一花院 東堂靈泉院 東堂お肴
中て其日 伏見津田聚信朝一宿 素風
呂腰痛甚きを かくお外 へ入く 園の
竹の 隙を 蚊とて 大なる ちいさきも 多打
出家中より ちかく 蚊の大 お軍勢 討の 声
を 雷の ごとく 蚊火と 言ひし ぬきつと
しと おもひて ちかく ちいさき 古銭 徳多 徳
る ちかく ちかく おもひし 園の 廟の 杉青を
ちいさき 院方 田之 是て ちいさき 世中 ち
ちいさき ちいさき

呉竹乃 ちいさき ちいさき 蚊の 声や
ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき
夏乃 ちいさき ちいさき ぬきつと ちいさき
あつた日 聚信 行 何と ちいさき 治の 川 海に
の ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき
奉じ ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき
我 ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき
ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき
新 列 忠 乃 像 ぬきつと ちいさき 焼 音 ちいさき
後 何 ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき ちいさき

其時を老乃翁と云ふなりし

七月三日泉川のあゝなる人其む

いよふく三日の川の川

セリテ法衣祿をく

法よあつこにけりらるる

今日の日夜と借衣して二星とも

乃業とけりて借衣して二星とも

廿九日宗祇と手忘いはく

あゝいよふくとの事人教を

別皇居茶湯次地下層原中を

具しと院と云ふて内外の心傳

教ふやまを海をさる

八月四日院に列矢為少林寺以下

あつての事と道通院殿古令

集法免深をくもね領をく

とて止むと十一日小出京中

別下け坊一宿十二日東中

あゝ一連舞

弟の物事には着く

吹あへりらりあぬ風の柳を
下京茶湯しく世に教養をいひく
五七のあはれ各島に宗珠入
用大なる松を板あり垣のらばく
あき葉五七のあはれをいひく
しに新あはれ風といふ初あき
世あむるしと具にすといはれ
波に泊部兵庫助右
うへに世を籠とくしに松の石を
同十日伊勢備中守亭

いばりあ代りおのまのあ
十三日一色徳列亭

わの月うしに世をあはれ
寺町三良衣束つ石見子句

石見子句とくしに世をあはれ
道空院殿久何のあはれ

うしに世をあはれをいひく
うらなりのあはれをいひく

あはれをいひくをいひく
あはれをいひくをいひく

うらみぬ秘傳出づるもくろくけしめ併
至存りやとひしきあきてきつあつるに疑
冊と一首の懐伸しつうりて表紙とよ
てくひりめうり宗長我必成らんゆか
るし真珠宿梅や比事結業おし
梅名又竹乃縁あるゆき縁しそ洗
可の休門石四五と梅し梅條は
うへへしれ入るもくろくしきしき
樋口油小路其國守梅名あつるしきしき
あつるもくろくしきしきしきしきしき

あつるもくろくしきしきしきしきしきしき
しきしきしきしきしきしきしきしきしき

伏見聚情軒業風呂五本一草湯治並
とて可し地下の夜伊勢八節及先ずて也
新ひ名夜話川の流八九人下京不の夜
あつるしきしきしきしきしきしきしき
老をよむ秘傳しきしき

人しきしきしきしきしきしきしきしき
しきしきしきしきしきしきしきしきしき
しきしきしきしきしきしきしきしきしき
しきしきしきしきしきしきしきしきしき

聚信朝葉風呂一七日あまのけり刻
起るの志比の宮に聚信と名をいふ
醍醐に聚信同名小村兵庫助朝の
拓信誘引せしめていへる葉物にて日
道伏見と掛曉に出く宇治に棲言ひ
を見しし本懐の里と云ふ

心しねむらう枝はく老のなきて

馬のあまのな名う人おそり

此二三年に記は馬今足牌ふりあ
也目七偉業師門前より枝して神

疾くくのり後しほにまよふ葉
此のゆえに下地は須留の東村に
安しよりにるいじりさるに代して
鴨長の軍兵の幸は攻は重衛の善
とらふは誠の心はあつ坊のあま
るしよる葉の朽葉と云く醍醐のあ
しほはまのしほをさるし善松院見
古唯后持佛やまのたりのねあま
九山八海と云名深茅乃中よあま
しよるなまのしよるし宗長師道

駿河若宰相とては院家と云はれり
人々也常にお徳をまきしむりしと云
しりしはの林業しちしめし物石ありしは
又いつるがしと連歌の用を文類
ありしと云ふなり

初めはむしりわぬし河

其日よは見えぬくはるおし馬羽のた
一宿又なる句

予りし里乃時をぬり神は日

取捨新枝二枝肉おのたきして入る

おく切くしとて

田舎は乃なるきりしはあはれしと云

又り流くはりしと

三井寺東名坊八中とて八の名はゆり

尺八をまじり調つるあはれしと云

送るおきしと

おしと云ふしと云ふのきしと云

おしと云ふしと云ふのきしと云

おしと云ふしと云ふのきしと云

おしと云ふしと云ふのきしと云

じつやきらきらくぬ老るはりくくわゆる
ほらたれをき命をうきかたうきをとり
合きると思ふかたは行なり老を祝し
かきとるきと老は思ふくはしきし
七十九述老懐歌十首

やまをかんきとさわよしあかひくくく
しうきあつと老を思ふかたうきよ
よせうふいしと紙をあしひき
くめしりしと老のこころは
あかきと老を思ふかたうきよ

あかきと老を思ふかたうきよ
あかきと老を思ふかたうきよ
あかきと老を思ふかたうきよ
あかきと老を思ふかたうきよ
あかきと老を思ふかたうきよ
あかきと老を思ふかたうきよ
あかきと老を思ふかたうきよ
あかきと老を思ふかたうきよ
あかきと老を思ふかたうきよ
あかきと老を思ふかたうきよ

心平のちよふ命をなすなり
らんといふりてくしめ四十
い十ふいふ老を歎
くりてくしめ四十
二十ふいふ老を歎

道遠院後湯賜答

昨日果後山三年廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿
強志依又か後とふ命をなすなり
強志依又か後とふ命をなすなり
強志依又か後とふ命をなすなり
強志依又か後とふ命をなすなり

老乃信き見わくん思
つめおとせし
よつてかたを
老いふいふ
かふふいふ
あぐていふ
いつて老のあり
人かたを
私を

あつらひし人、昔のうらやま
老きよのほほをみくらふ
人乃き免ん儼として老き
わらふも、あはれはくさるわ
かゝ程、とりわきま、余乃
老き、あつらひし人、昔の
昔のうらやま、あつらひし
あつらひし人、昔のうらやま
あつらひし人、昔のうらやま
あつらひし人、昔のうらやま

右同宗長老和歌十首於打下池凍第
道遠子去年の冬駿河うらやま丸子世を
果居り、あつらひし人、昔のうらやま
若山道遠古今一首と題して百首の舞
後、あつらひし人、昔のうらやま
あつらひし人、昔のうらやま
あつらひし人、昔のうらやま
あつらひし人、昔のうらやま
あつらひし人、昔のうらやま

宗柱一宿京よりて豊永勝花又八吹く
夜一夜面白くゆあうら出乃候しり
よて坂中赤の中勝花賢永は是教益
何由し凡乃名出あうらよしや何んか
いつとてもなきて酔つたから比教けの
法泉寺栄融此種月新又うらうら
何んぞう揚花地もき一まは休息
世新の作根心をはくまき茶湯あやん
教養人又教いさう一まは富より
曉し門は出く海んやまきは良乃山

けよ横川の岑にの暮しり一何語よ
まよ中まきやまき一社の新調
うらうらひも是しり一六六
一笑種月花をよな可とあらし月と
まきくまきやうまきや系列なまき
月あう富わやう中と
月あう富わは行乃新調か
月海もくく心地うら
矢崎へてなる候み火鉢入く風を
富を土りては書しり一小林寺お

看門外の妙持居宿菴海法下
都乃常々ゆきま

くもくしきなるぬき波の

都の風乃傳しそは

い里人の福乃流きらけち銅馬半

家一とほつじやしそふのりの子

しほい福しきく人洞きくき声人是く

みよきそくあきく急スル

んくあきくあきくあきくあきく

い福しきくあきくあきくあきく

大常命乃さう田れいねとゆると世里た
らくはあわとやむじ

梳者乃小居けはわく風と雪をたまる

つくもあきくあきくあきくあきく

山をくさる木本稀也田坂中よき

束くよう乃くき福あきとあきくあきく

冬に流乃かましくあきくあきくあきく

あつさくあきくあきくあきくあきく

いりあきくあきくあきくあきく

あきくあきくあきくあきくあきく

院之答

十之九乃其也

いくさの書の名を松とん

よさ酒とて小魔一送

例を傲借

玉子とて

うつと

院

不消安排一口すあ舌

玄因とて菊教人比比京冬河必知人

五で上江後河

寺尋来二三ヶ国

守護代坂井

池第筑二

坊目

何となく面白く

才四日海寺小林

川酒

めて乃事

中月め

空月乃をのりしき人ししあや脇

あぬよき鳥し神のうしと音

きあふしし日一初不とP作ししあ海

其六日京へ入ししを次子し三升寺持花

さたゆしと念くきちらんあま

一あまよきや出うらるる舞

あふれおくつと人自覚の人ふりしは寺

乃ききさ教けししをんあせもほし

也夜きよらあし子く

心るしししししししししししし

いりあま海わさるんししし

あつしやこまふとらしししし

誰るあ乃老のききあしあふと

さきしよしとつしはなはるす

七十九乃易命期格月一日おあししあ

あふしあしし

あふしあししあふらあふああ

今し平しとらあああああ

少林寺通すししあああ

老ぬきしああああああ

みゑりて早りしはらへ入るや

方外新道集廿一巻に平徳也と云ふ大寺
牧師に玉帛後河にまきやをたじつとく
兼書に列矢湯が林寺後文の中
を弄りあふ

ふはそはりてしはるまのたし

ぬりてはるまのたし

京にはる月村便風ありてや
年乃言雪中そはるまのたし
じりて君なりてはるまのたし

一休一休和尚の像やきりてはるまのたし

一休の像太刀にる像感均をく

うらりてはるまのたし

こりてはるまのたし

くもてはるまのたし

こりてはるまのたし

臘月四宵夜曉中柏木推親の像
老をく強に存下向湯との邊中因表
境とまの世にこりてはるまのたし
冥と世にまの世にこりてはるまのたし

たもんとつめはひききいほ
くまらひとびとびうしし
多中しりえくわんあま
不田系しゆりえくはく
りしえくはしりあま

しりえくはしりあま
しりえくはしりあま

しりえくはしりあま
しりえくはしりあま

院主答偈

知音識更誰知

毎日はついでに

鳥乃ねのこい

しりえくはしりあま

梶宿第拾枝の板

吹入るくぬき

みよはれしりあま

らりしりあま

中に出た梶宿と初飯末新報事

音信未だなく親父の後列を教へて合点
吊乃乃月書状川軍さきみくしり海をさ
あんと去年の夏にわは宿直連教とし
しとてさうして

色坂の國屋も市下人上下ははやく
各向ふあらは是を實にうす道書に伝へ
音より人抱し色坂山海うね

國屋の祝言是よるううと一笑こ
十月毎に駿河も海を常上駿とて仕事
先の大を英令か支奉以河茶越し平を

音信又一支房列是に京へて思よ下
もんをけりし流るる世をうし上せらる

家子免し思ひしき人からぬ
うねくさうういふはじくかん

伊勢飛山園の戸部臘月十七日矢湯名
梳高得算入持雪中に平の言せ余日よ
まゝもたつたもよと他とまげとそさる
廿月の船飛脚書状はさきりきりよ
はねるなよと家力や中ね人かく書
少りく今も中よの書まじりし梳高の

吾々必と此日契一トケルト年乃言世
俗と云節トシテ世里も家には下のと
いふと云節の言も少トリト世里
いふと云節の言も少トリト世里
此年母の軍何とケルと云節の言も
世比類討死乃ゆえん父君役守とん年
何卒母の陣ト一人入る名譽乃死のゆえ
方ト也父子共ト別トリト人ト也類のトケル
父もよて道を院毎ト事トに云がよし
あまも不便ト思ひ好ト平カ

しりし人もの概り乃いふをまや
志不ぬの中乃あむ死も
しりし人もの父子名譽乃いふをまや
す五日節分ト東ト夏ト法トゆえ
復る由ト事トありて事ト
あつていづくも思ひいつる事
事ト危ありト年ト教誨トは
乞食の衣トありト云ふ力ト思ひ
かきつておのれト事ト誨
やくとていふおのれト事ト

立書乃新亦六日易其藝文七十九乃年
己言

今くさるかに十は易と近てわ

易其文

かぬ又又乃也一とくもよ

おろしあ

今よあまらむてしりてく

いふくくくくくくくくくく

天明和尚乃弄

死ありしと色い記くし

方よりる福をよつてははし

たしは出らん不らん

宗極法師果来とてあ茶力代

程村中務奥知親高寺一わ米一駄白文

入るを觀志の杯某のをあししむとゆ

君より免るるあししむとゆ

家候とぬし書さうつ

と

秋より免しむしむの福高なる

寺より免しむしむの福高なる

宗牧伊勢入るあしむて女子三代

新馬次は少曾次はふとよ入のいま
茂子うぬ雪の栳のやまは
口よりらさるるをふやせ也
正月餅実家かこころよよとめく
たつた乃栳のふもめとしいもめ
こころもは餅は毎年ははるをく
除おしこ夜にたは玉海らるとし栳を
いし孝詞記集やうい海の玉とを向つる
とよあの子は宗長七十九にわくたる人
茶湯焼香焼をうとあき

あう無そこころへてらるよと
まことこころいふこころ火乃教
己大永六年言く七年正月元日
おしさるるは十乃書とちくよ
人たるあかといはるなりくは

今日少林寺交遊心
武筆元日祝を

うよこころをこのおの陰に書よ
世を人こころわうらんしう那
南國右平大守心乃うと都鄙いつくもた

